

『狐の癒し火は誰が為に』

作者:はてい

登場キャラ

玉丸一ぎょくまる一(女性):もとは妖狐だった。義仁の式神となり、人の姿となる。傷を癒す炎を出すことができる。炎の色は緑(翡翠)色。

義仁一よしひと一(男性):陰陽師であり、玉丸の使役者。他にもろくろ首、座敷わらしを式神としてそばに置いている。玉丸達のことを単なる式神ではなく、家族のように思っている。

ろくろ首(女性):義仁の式神。義仁の屋敷の掃除、食事の準備など家事全般をこなす。

座敷わらし(演じるのは女性男性両方可):義仁の式神。幼めの少年の妖怪。義仁と遊ぶことが大好き。

ぬらりひょん:義仁の屋敷に出入りする妖怪。義仁のことを気に入っている。

忠康(男性):国より鬼討伐隊を任せられている。義仁に式神を貸し出せと言ってくる。あくまでも式神は者扱い。

登場キャラ(ちょい役)

・前半

子供(男性、女性どちらでも可):怪我をしている。妖狐の頃の玉丸から逃げている

・中盤

天狗(男性):義仁と共に戦う式神。鬼の出現を教えに来てくれて、一緒に討伐へ向かう。

負傷兵1、2、(男性、女性どちらでも可):玉丸が参戦した鬼討伐の兵

・後半

女性(女性):玉丸の養生所に訪れた女性

男の子(演じるのは女性男性両方可):女性の息子

男(場合によっては声のみ役):玉丸の養生所に訪れた男

演じるうえでのお知らせ

・玉丸について

玉丸にはモノローグがあります。箇所は(M)で示しています。

・ちょい役について

ちょい役がたくさんありますが、諸々演じる側の諸々のご都合で可能であれば、兼役してくださっても大丈夫です。

・※について

※で囲われている部分は、声劇のように音声だけで演じてもらって構いません。暗転中に音声、声だけ流すなど。

以下、本編です。

※↓

場面:森の中。逃げる怪我をした子ども。それを追いかけてる緑の火を纏った、白い狐。

子ども「やだ！こっちに来ないで！」

玉丸「(現在妖狐)待って！あなた怪我をしてるじゃない！」

子ども「火！？誰か！誰か助けて！」

玉丸「(〃)違うの！待って！これはあなたを傷つけるためじゃなくて…！」

※↑

(※↓～※↑は実際に演じていただきても、音声だけでも可。以下にも記載がある各※↓～※↑も同様です。演者様方のご都合に合わせて、実際に演じるか、声劇のように音声だけで演じるかご判断ください。)

暗転

0:少しの間

※↓

明転

場面:森の中

効果音:雨の音

玉丸「(〃)(M)雨が降るのに陽が差している。辺りには土の湿った臭い。雨が冷たい。身体も冷たくなってきた。」

動き:「陰陽師、「義仁」登場。

義仁「…大丈夫かい？」

玉丸「(〃)陰陽師か…。女狐を狩りに来たのですか？」

義仁「そんなつもりはないよ。こんなところで独りで…今にも消えてしまいそうだね。」

玉丸「(〃)関係ないでしょう。」

義仁「…そうか。どうかな？いっそ消えてしまうのなら、私の式になってみないかい？」

玉丸「(〃)こんな力、何に使うのですか？」

義仁「それは君が決めればいいさ。…時間がなさそうだ。儀式を行いたいのだが、攻撃してくれるなよ。」

動き:義仁、玉丸に一步近づく

玉丸「(〃)く、来るな！燃やすぞ！」

動き:緑の光

義仁「！！…ああ。なんて綺麗な翡翠色の炎だ。」

玉丸「(〃)…え？」

義仁「では始めるね。「汝、その力を以て我の式となり、この血筋絶えるまで力となれ。名を…

玉丸(ぎょくまる)とする。」

※↑

暗転

0:少しの間

：

明転

場面:玉丸、白い着物を着た人の姿になっている。

玉丸「(M)雨の音、湿った土の臭い。目を開ければ、陽の光を感じる。…？少し視線が高い気が…。」

義仁「今は異形に厳しいからね。なるべく人に近づけた。感覚に慣れるまで少し苦労するだろうが、許しておくれ。」

玉丸「そうですか。」

義仁「それじゃ行こうか。私の屋敷に案内するよ。」

:

暗転

玉丸「(M)こうして、私はこの人の式となった。」

:

明転

場面:義仁の屋敷、玄関

義仁「ただいま～。」

動き:座敷わらしが義仁に突進

座敷わらし「よおおおしひとおおお！！！」

義仁「ゴフッ…！」

玉丸「え、ええ！？大丈夫…？！」

座敷わらし:「ははは！お前の負け！これで俺は今日で10連勝！！」

義仁「おまええ…。帰り際はやめろっていつも…。」

座敷わらし「あは！気い抜いてる義仁が悪いんだい！」

動き:ろくろ首登場

ろくろ首「こらこら。また悪さしちゃって。義仁様、おかえりなさい。この度はお怪我はございませんでしたか？」

義仁「ああ、今怪我したところだ…。」

座敷わらし「なあなあ！そのお姉ちゃん、誰だ？」

玉丸「ああ、私は…」

動き:ぬらりひょん登場

ぬらりひょん「おや？坊やじゃないかあ。帰ったのかね？」

義仁「おお、ご老人。帰ったよ。」

ぬらりひょん:「ん？これはこれは。お主は玉藻の一派の…。これはべっぴんさんだ。一緒に酒でもどうかね？」

義仁「いきなりおやめください。ご老人、この者は玉丸といいます。今日からこの屋敷に住んでもらうことにしました。」

ぬらりひょん「ほっほっほ！また賑やかになるのぉ！」

義仁「ということだ、玉丸！今日からここが君の家だ！まずは…そうだな、ろくろ首、玉丸に新しい替えの服を見繕ってあげてくれ。」

玉丸「え、ええ？

ろくろ首:まあ！いいですね！この屋敷には、無駄なほどお着物があるのよお。」

義仁「おい…仮にも主人の前だというのに…。」

ろくろ首「ささ、行きましょう！」

玉丸「ああ！ちょっと！」

暗転

0:少しの間

明転

場面:屋敷の一室、着物を見比べているろく。それを見ている玉丸。

ろくろ首 「うーん、こちらの着物がいいかしら…。」

玉丸 「あの…。」

ろくろ首 「ん? どうしたの?」

玉丸 「あなたも妖…ですよね?」

ろくろ首 「ええ、そうよ! とは言っても、今は義仁様の式ですけどね。ここにいるのはみんな式よ。座敷わらしも。今はいないけど、天狗さんもいるわ。…ぬらりひょんさんはわからないわねえ。…あ、この色良いかも…。」

玉丸 「…一体どんなことしてるんですか?」

ろくろ首 「最初は戸惑うわよね。お屋敷のお世話をしたり、戦いにでたりかしら?」

玉丸 「た、戦い! ?」

ろくろ首 「安心して、戦いといつても、天狗さんしか行かないから。私なんて戦い向きなことできないし…。あ、でも式になつたら義仁様のお力が少しつけてもらえて、腕も伸びるようになつたのよ! ホラ! これでお掃除も渉っちゃって!」

玉丸 「そう、ですか…。」

ろくろ首 「お掃除して、お食事を作つて、こうしてお着物選んでって、のびのびやらせてもらつてるわ。コレとコレ…と、よし! さあ、これに着替えて皆んなの所へ行きましょう!」

暗転

0:少しの間

:

明転

動き:一同集う所へろくろ首と玉丸登場。玉丸は淡緑色の着物を着ている。

ぬらりひょん 「おお! こりゃまた淡緑の着物がよく似合う!」

義仁 「うん! よく似合つてるよ!」

ろくろ首 「よかったですわあ。この着物、義仁様の奥様が置いていったもので、ずっと埃を被つていの!」

玉丸 「奥様が…?」

ろくろ首 「ほら、私たち、もとは妖でしょ? それを四六時中出しているものだから、気味悪がられちゃつて、出でていっちゃつたのよ。私は式符に戻りますよって言ったのにねえ。」

座敷わらし 「あの中、意外と快適だったから、俺もいいよって言ったのにねえ。」

義仁 「うるさいなあもう! …ゴホン、玉丸、改めて歓迎するよ、我が家へ! これからよろしくね。」

玉丸 「よ、よろしくお願ひします。」

座敷わらし 「ろくろ首~、お腹すいたー。」

ろくろ首 「だーめ。先にお掃除をしましょ。」

ぬらりひょん 「おっとわしは用事が…。」

動き:その場を立ち去ろうとするぬらりひょん

ろくろ首 「ぬらりひょんさんは窓拭きをよろしくお願ひしますね。」

ぬらりひょん 「ぬう…。」

ろくろ首 「玉丸さんは床掃除を…」

座敷わらし 「雑巾勝負しようぜ!」

ろくろ首 「それいいわね! 一緒に床掃除をよろしくお願ひしますね。」

玉丸:わかりました…。」

暗転

場面:掃除が終わり…

明転

場面:玉丸と座敷の二人。座って話している。

座敷わらし 「ああ～疲れた～。…お姉ちゃん、なかなか速いね！」

玉丸 「ありがとう。…ねえ」

座敷わらし 「ん～？」

玉丸 「あなたも、もとは妖だったんでしょう？どうして式に…。」

座敷わらし 「ああ俺、人間に友達が欲しくてさ、でもなかなか気づいてくれなくて…。悪戯したら気づいてくれるかなって思ったんだ！そしたら、逆にみんな気味悪がっちゃってさ、祓われそうになったんだよね…。そのお祓いにたまたま義仁が呼ばれて、式にならないかって！」

玉丸 「そうだったの…。」

座敷わらし 「そしたら義仁がお友達になってくれてさ！楽しいよ！今は勝負に10連勝中！にしし…」

玉丸 「ああ、さっきの。」

座敷わらし 「そうそう！それでね…！？いてて！」

動き:座敷わらし、膝を押さえる

玉丸 「どうしたの！？」

座敷わらし 「あはは…さっきはしゃぎすぎちゃったみたい…。」

玉丸 「ちょっと見せて。」

動き:玉丸、座敷わらしの痛む部分に手を添える。緑の光

0:少しの間

座敷わらし 「あれ…？なんか、痛くなくなったような…。」

遠く(舞台袖?)からろくろ首の声

ろくろ首 「皆さん！お食事の用意ができましたよ！」

座敷わらし 「お！ご飯だ！おねーちゃん行こ！」

玉丸 「え、ええ！」

暗転

明転

場面:机を囲んでいる。夕飯が終わり…

座敷わらし 「はあ！美味しかった！やっぱりろくろ首のご飯は美味しいなあ！」

ろくろ首 「うふふ、それはありがとう。」

義仁 「特に今日は玉丸も増えたし、やっぱりみんなで食べると美味しいね。」

ぬらりひょん 「わしもよう食ったわい…。」

ろくろ首 「ぬらりひょんさん、今度はちゃんとお掃除手伝ってくださいね。まったく、いつの間にかふらっといなくなっちゃって。」

ぬらりひょん 「ほっほっほ。」

ろくろ首 「玉丸さんもありがとう。いつもよりお掃除が早くおわったわ！」

玉丸 「いえ、そんな」

効果音:突風が吹く音

ろくろ首 「あら、この風は天狗さんかしら？」

動き:天狗登場

天狗 「お楽しみのところ悪いな…。義仁、鬼が出たぞ。」

義仁 「わかった。行こう。」

動き 「義仁、立ち上がり天狗のもとへ」

玉丸 「！！私も力に…！」

動き:玉丸、立ち上がり義仁へ言う

義仁 「大丈夫だよ。ありがとう。みんなと一緒に留守を頼むよ。ご老人、屋敷の守りは頼めますか？」

ぬらりひょん 「お主も大変じゃの。仕方ない。見といてやるわい。」

義仁 「ありがとうございます。それじゃみんな、行ってきます！」

動き:義仁と天狗退場

座敷わらし 「いってらっしゃーい！…お姉ちゃんって戦えるの？」

玉丸 「いえ、戦えないけど…。」

座敷わらし 「ならここにいなよ！大丈夫、義仁強いし！」

暗転

明転

場面:夜が明け、皆がいる屋敷に義仁が戻ってくる

義仁 「ふう、ただいま。」

座敷わらし 「よおおおしひとおおお！おかえり！」

動き:座敷わらし、義仁へ突進

義仁 「ほい！」

動き:義仁避ける

義仁 「はっはっはあ！今日は私の勝ちだな！」

座敷わらし 「ぐぬぬう…俺の連勝記録が…。」

ろくろ首 「おかえりなさいませ、義仁様。」

玉丸 「おかえり、なさい…。」

義仁 「ああ、ただいま！みんな留守をありがとうございました。ご老人も守りをありがとうございました。」

ぬらりひょん 「ほっほっほ。礼の代わりにまた酒でも持って帰っておくれ。」

ろくろ首 「あら！！怪我をしてるではありませんか！」

義仁 「ああ、ちょっと気が緩んでね…。」

ろくろ首 「すぐに布と湯を持ってきますね！」

動き:ろくろ首、布と湯を取りに去ろうとする

玉丸 「あの…！」

動き:ろくろ首、止まり戸惑って戻ってくる

義仁 「どうしたんだい？」

玉丸 「…傷をこちらに…。」

義仁 「ん？あ、ああ…。」

動き:玉丸、傷に手を添える。緑色の光

玉丸「…いかがでしょうか…？」

義仁「傷が消えた…！」

ぬらりひょん「ほう？これはこれは。」

座敷わらし「お姉ちゃんすごい！それじゃ義仁遊ぼう！」

義仁「さっきちょっと遊んだだろ！玉丸、ありがとう。おかげで少し元気になったよ。」

玉丸「い、いえ！ならよかったです。」

義仁「とはいえ流石に眠いな…。しばらく寝るよ。みんな、おやすみ。」

座敷わらし「ちえー！遊びたかったのに！おやすみ！」

ろくろ首「おやすみなさい。」

動き:義仁、去りながら暗転

:

:

明転

場面:ある日の夕方。屋敷

ろくろ首「さて、今日も夕飯の支度を始めましょうか！玉丸さん、お手伝いしてくれる？」

玉丸「はい、ぜひ！」

ろくろ首「ふふ、ありがとう。」

義仁「(M)ふふ、玉丸もだいぶ馴染んできたなあ。」

効果音:突風が吹く音

動き:天狗登場

天狗「邪魔するぞ。義仁、行くぞ。鬼だ。」

義仁「…わかった。すぐ支度をする。」

玉丸「義仁様！」

義仁「どうしたんだい？」

玉丸「…いってらっしゃい！」

義仁「うん！行ってきます。」

動き:義仁、天狗退場

ろくろ首「それじゃ、義仁様が帰ってくるまでに夕飯を作っちゃいましょう！」

玉丸「はい！」

暗転

:

明転

場面:その日の夜

動き:義仁、天狗に肩を抱えられながら入ってくる

ろくろ首「おかえりなさい、よしひ…義仁様？！」

座敷わらし「義仁？！」

動き:座敷わらし、義仁に駆け寄る

玉丸「！？」

動き:玉丸、義仁に駆け寄る

義仁「はあ…はあ…(苦しそうな息遣い)」

天狗「先の討伐でな。傷が深い。」

義仁「う…。みんな…ただいま。」

ろくろ首「喋らないで！傷に障ります！湯…湯を持って参ります！」

動き:ろくろ首、道具を取りに行って捌け、もどってくる

天狗「ぬらりひょんよ。お前の友にこの傷を癒せる妖はないのか？」

動き:天狗、義仁を座らせながら言う

ぬらりひょん「んん…。ここまで深い傷になるとな…。」

動き:玉丸、一步前に出て言う

玉丸「…私に…私にやらせてください！」

座敷わらし「お姉ちゃん、治せるの？」

玉丸「ううん、やってみないと…なんとも…。」

義仁「はあ…はあ…玉丸…頼んだよ…。」

玉丸「はい…！」

玉丸「…お願い…！治って…！！」

動き:玉丸、傷に手を添える。強めもしくは広い範囲の緑色の光。

座敷わらし「！？わあ、綺麗な色の火だあ。」

ろくろ首「ほんと、こんなの初めて見たわ。」

義仁「はあ…はあ…ふう、ふう、ふう…。(呼吸が安定する)」

座敷わらし「傷が…塞がってる…？」

ろくろ首「すごい…。」

ぬらりひょん「…。」

玉丸「…はあ。」

動き:玉丸、手を戻す。緑の光消える。

玉丸「義仁様、いかがですか？…義仁様？」

ろくろ首「義仁様？起きて義仁様！！」

暗転

:

明転

場面:翌朝

動き:義仁、起き上がる

義仁「朝か…。傷が、癒えている。そうか…玉丸か。…うう、しかし気怠いな…。」

ろくろ首「義仁様！？お目覚めになったのですね！」

義仁「ろくろ首、心配をかけたね。」

ろくろ首「お怪我の具合は？」

義仁「うん！もう大丈夫だよ！」

ろくろ首「よかったです…。さあ、朝食にしましょう。みんな待っておりますよ。」

義仁「うん、すぐ行くよ。」

暗転

明転

動き:義仁、皆のいる場所へ登場

義仁「みんな、おはよう！」

座敷わらし「義仁！」

玉丸「義仁様、お身体のほうは…」

義仁「うん、もう大丈夫だよ。ありがとう。」

玉丸「ああよかったです！」

ぬらりひょん「おお坊や、身体はもういいのかね？」

義仁「ええ、もう大丈夫です。世話をかけました。」

ぬらりひょん「気分の方は？」

義仁「…しっかり休めたので、気分も絶好調ですよ。」

ぬらりひょん「…ふむ、…よからう。わらしが遊びたがっておったぞ？のう、座敷わらしよ？」

座敷わらし「そうだぞ義仁！遊べ！」

義仁「流石に朝からはきついな…」

座敷わらし「ええ～！」

ろくろ首「ふふふ。」

暗転

玉丸:(M)もっと、この力を役立てたい。そう思っていると、力を使う機会が新たに訪れた。

明転

場面:ある日、屋敷に来訪者あり

動き:忠康が登場

忠康「邪魔するぞ。やあ陰陽師。」

義仁「忠康殿…。」

忠康「先の討伐では大変だったそうだな。」

義仁「…今日は何の用だ？」

忠康「それがな？あの傷をどうやって癒したか、興味が湧いてだな。…ん？新顔がいるじゃないか…もしかしてそいつか？」

義仁「要件はなんだ。早く言え。」

忠康「ははは、つれないなあ。近々、大物の討伐を行う。それに際してお主にも戦力を新たに貸してほしい。例えば…その傷を癒したやつとかな？」

義仁「そんな危険なところに連れて行けるものか！」

忠康「何を言っている。ただの式神だろう？道具を役立てずにどうする？」

義仁「玉丸は家族だ！道具なんかじゃない」

忠康「貴様わがままを控えたらどうだ？お館様の御計らいで、こんな屋敷も貰えて、式神も好き勝手に出せている。本来ならば戦力として厳重に取り扱われるべきだ。」

義仁「また道具扱いして…！！」

忠康「(食い気味に)まあ考えておけ。それではな。」

動き:忠康、退場

玉丸「…わらしくん、あの人は？」

座敷わらし「なんか鬼を討伐する軍の隊長さんだってさ。ああやって時々うちに来て、義仁に式神を貸せって言いに来るんだ。」

玉丸「そうなんだ…。」

義仁「…クソ！ろくろ首！塩持ってきて！塩！」

ろくろ首「はいはい。」

玉丸「義仁様…。」

義仁「玉丸、気にしないで。」

玉丸「あの、そうではなくて…」

義仁「…ん？」

玉丸「私も…私も連れていいってください！」

義仁「？！…あいつらは君たちのことを物みたいに考えてる！あんなやつらのために戦わなくたっていいんだよ！」

玉丸「わかっております…！わかっている…つもりです…。でも、義仁様を治せたとき、私のいる意味を感じたんです！」

義仁「玉丸…。」

玉丸「もっとあなたのお役に立たせてください！力を使いたいんです！」

義仁「本心からそう思ってるんだね？」

玉丸「はい、そうです。…だめですか…？」

義仁「…わかった。一緒に行こう。でも、無理だけはしちゃダメだよ？」

玉丸「…！ありがとうございます！」

:

暗転

場面:数日後、鬼討伐戦戦場、後方陣地にて

:

明転

動き:負傷兵登場

玉丸「負傷者はこちらに運んでください！」

兵1「いてえ…いてえよお…」

玉丸「大丈夫、今治しますからね。」

動き:玉丸、負傷兵に手をかざす。緑の光。

兵2「おい式神！こっちにも早く来いよ！」

玉丸「はい！すぐに行きます！」

動き:玉丸、舞台上を移動して、治療をして周る

0:遠くで見守る義仁、隣に忠康(舞台の端?)

忠康「しかし役にたつ式神だな。次も持ってきてくれよ。」

義仁「…あの子自身の意思でここに来たんだ。」

忠康「ほう？そりや頼もしいね。…しかし、お前どうしたんだ？顔色が悪いぞ？」

義仁「ただ寝不足なだけだ。」

忠康「おいおい頼むぞ。もう少ししたら俺たちも出陣だ。行くぞ。」

義仁「わかった。」

動き:義仁、忠康、退場

暗転

:

明転

場面:戦いが終わり

玉丸「ふう…。」

義仁「玉丸、お疲れ様。」

玉丸「あ、義仁様、お疲れ様でした。」

義仁「よく頑張っていたね。大丈夫かい？」

玉丸「ええ、大丈夫です。…義仁様こそ、お怪我を…。」

義仁「ん？少し気が緩んだ隙にね…あはは。」

玉丸「お怪我をこちらに見せてください。」

義仁「ああ。」

動き:玉丸、傷に手を添える

玉丸「…いかがですか？」

義仁「うん！痛みがなくなった！ありがとう。」

玉丸「よかったです。」

義仁「本当に素晴らしい力だ。玉丸がいなかったら、みんな無事で帰れなかつた。君のおかげだよ。」

玉丸「…私だって、義仁様の式神にならなかつたら今頃…」

義仁「儀式の時は思いっきり威嚇されたけどね」

玉丸「あ、あれは！だって」

義仁「(被せるように)あははは！さあ帰ろう！みんな待ってるよ！」

玉丸「ちょっと待ってください！もう！」

暗転

玉丸:(M)…でも、知らなかつた。私の力には代償があることを。

明転

場面:夜中、部屋にぬらりひょんと義仁、遠めに玉丸

玉丸「はあ、変な時間に目が覚めちゃつた…。少し水を…。」

ぬらりひょん「坊や、だいぶ辛そうじゃの。」

義仁「そうですか？別に変わり無いですけど…。」

玉丸「…ぬらりひょんさんと、義仁様…？」

ぬらりひょん「ほっほっほ。強がるな。どうせわししか聞いとらん。…式が力を使うにも、それなりの気を分けねばならんじゃろう？特に玉丸の力。あれはお主の命を削って癒しておるに等しい。しかも表だけな。首長(くびなが)や童が使う力とは訳が違う。お主、このままだと、すぐに死ぬぞ？」

玉丸「…！」

義仁「…さすが、長く存在してるだけありますね。…。構いませんよ。あの子が少しでも自分の存在に意味を見出せるのなら。」

ぬらりひょん「自分の命が尽きようとも？」

義仁「ふ…隨分と心配をしてくれるんですね？」

ぬらりひょん「お主のことは気に入つとての。わざわざ小物を式にして、側に置くやつなど、これまでの陰陽師で見たことがない。」

義仁「…あの子達は人を殺めているわけじゃないんです。玉丸なんて、あんなに素晴らしい力があるのに…。ただ人に畏れられるだけなんて。」

ぬらりひょん「陰陽師ならいざ知らず、普通の者からしたら妖というだけで畏怖の対象じゃ。当然じゃろう。」

義仁「そう、ですね。」

玉丸「…。」

動き:玉丸、俯きながら退場

義仁「…あの…ご老人…、頼みがあるのですが…。」

0:少しの間

動き:喋るフリ

ぬらりひょん「ぬかしおるわ。…まあ、よかろう。同族を世話してくれた礼じや。総大将として、それくらいのことはせねばの。」

義仁「ありがとうございます。」

ぬらりひょん「さあ…夜も明けてしまうぞ。わしは散歩でも行こうかの。」

義仁「ええ、私は少し寝ます。今夜はありがとうございました。」

暗転

明転

場面:翌朝

義仁「はあ(大あくび)、あ、玉丸おはよう。」

玉丸「義仁様、おはようございます…。」

義仁「ん? どうしたんだい? 浮かない顔して。」

玉丸「私の、私のせいで義仁様が…。」

義仁「! ? …昨夜の話、聞いてたんだね。」

玉丸「なんでもっと早く言ってくれなかつたんですか!! 私…私! 力を使うたびに義仁様を死に近づけていたなんて…!」

義仁「君はそんなこと気にしなくていいんだよ。」

玉丸「でも…!」

義仁「こう見えて私は名の知れた陰陽師なんだよ? 自分の式の力なんかでへばらないよ!」

玉丸「私は義仁様のお力になれてたつもりで…」

義仁「玉丸、よく聞いて。私が大怪我をして帰ってきた時のことを覚えてるかい?あの時、君がいなければ私は死んでいた。私を助けてくれているじゃないか。私だけじゃない。多くの人の命を救っている。君の力は誰一人として死に追いやったりはしていないんだよ。これからも。ずっと。」

玉丸「…。」

義仁「さあ! 朝ごはんを食べに行こう! 玉丸に頼ってばかりではなく、ご飯をしっかり食べて元気でいいとな!」

玉丸「私は…。」

義仁「…大丈夫。玉丸は自分のできることをいっぱいやればいい。さあ、行こう。」

玉丸「…はい。」

暗転

玉丸:(M)…そしてその日はやってきた。

※↓

義仁「ふう…今日も疲れたな…。さて、ご飯でも食べて明日の準備を…あれ…? 目眩がす…。」

ろくろ首 「義仁様一？大きな音がしましたが大丈…義仁様！？」

※↑

0:少しの間

明転

場面:義仁の部屋にて。横たわっている義仁の周りに一同

義仁 「はあ…はあ…はあ…。」

座敷わらし 「義仁お…」

ぬらりひょん 「ふむ…こりや気が尽きかけとるな…。」

玉丸 「義仁様？！」

ろくろ首 「玉丸さん…！」

玉丸 「だめ義仁様！死なないで！」

動き:玉丸、治療を始める。強め、もしくは広い緑の光

玉丸 「お願ひ…！治って！治ってよ！」

義仁 「玉丸…。もういいんだよ。よく、頑張ってくれたね。」

玉丸 「私が…私が治します！！」

ぬらりひょん 「やめておけ、玉丸。お主の力は傷は治せても、気は戻せんじゃろう。そのまま続けても、悪戯に坊やが弱るだけじや。」

玉丸 「そんな…」

義仁 「ほら、そんな顔しないでおくれ。私はみんなが活き活きとしている姿を見るのが好きなんだ。」

玉丸 「義仁様…。」

ろくろ首 「…。ほら玉丸さん、夕飯の準備をしましょう！義仁様には少しでも食べて長生きしてもらわなくちゃ！義仁様、頼みますよ！あなたが死んでしまったら、私達困ってしまうんですからね！」

義仁 「ははは…。それはそうだ…。ろくろ首、精がつくものを頼むよ。」

ろくろ首 「お任せください！さき、玉丸さん、食事の準備に行きますよ！」

玉丸 「…はい。」

暗転

玉丸:(M)それから義仁様は食事はとれるものの、床からは起き上がりにいた。

座敷わらし 「義仁！指相撲また俺が勝ったな！もう何回目だ！？」

義仁 「あはは…。座敷わらしは強くなったなあ…。流石にもう連勝を止められそうにないよ…。」

座敷わらし 「まったくう。頼むよ！遊びがいがないんだからあ！」

義仁 「はは、ごめんごめん。座敷わらし、ごめんね、少し眠らせておくれ。また指相撲やろう。」

座敷わらし 「うん！ゆっくり寝て元気になってよ！俺はろくろ首のところに行っておやつでももらってこよ～！」

義仁 「ふふ…。おやすみ。」

0:間

※↓

座敷わらし「グス...ろくろ首い...義仁が死んじゃいそうだよお...」

ろくろ首「大丈夫、大丈夫ですよ...。」

玉丸「...。」

※↑

玉丸:(M)それから、義仁様はお食事も満足にとれなくなつた...そして...

場面:横たわっている義仁、周りに一同

義仁「みんな...世話をかけたね...。」

ろくろ首「...もう喋らないでください！」

義仁「はは...そんなに泣かないでおくれ。ろくろ首...君のおかげで...とても素敵な暮らしができ
た...。...座敷わらし...勝負は...君の勝ち越しだな...。」

座敷わらし「義仁お願い...！そんなこと言わないでよ！」

義仁「玉丸...、君も立派になったね。もう僕がいなくても...大丈夫だろう...。」

玉丸「いやだ！私はまだあなたのために...！」

義仁「ははは。嬉しいな...。...「解」。」

玉丸「！？」

義仁「うん...みんな、人間の姿のままだね...よかつた。...ご老人。」

ぬらりひょん「...わかつとる。」

義仁「ありがとうございます。...ほんと...楽しかったなあ...。みんな...ありがとう。」

ゆっくり暗転(できれば)

0:しばらくの間

※↓

0:ある日の町の片隅、養生所で

男「ねーちゃん！あんがとよー！」

玉丸「今度から怪我に気をつけるんですよー！」

玉丸「(M)私は今、町の養生所にいる。…あの後、ぬらりひょんさんからこんな話があった。

※↑

0:回想、義仁の死後数日して

座敷わらし「グス...義仁お...」

ろくろ首「大丈夫、私がついてるわ...でも...どうすれば...。」

ぬらりひょん「...さてお主ら。わしの屋敷へと行くぞ。」

ろくろ首「え...？」

ぬらりひょん「坊やからことづかっておっての。ろくろ首、お主はわしの屋敷の世話をせい。こ
こでやっておったことを活かしてくれ。わらしよ、お前はこれからはわしと共に、人間の家を周る
ぞ。悪戯だけで友を作ろうとするな。もっとやり方がある。それを学べ。坊やからの宿題
じや。」

座敷わらし「義仁からの…？」

ぬらりひょん「そうじゃ。そして、玉丸。お主はどうする？」

玉丸「…え？」

ぬらりひょん「お主はその力をうまく使っておった。やりようによつては人の世にもうまく溶け込める。坊やもそう言つておつたぞ。」

玉丸「…私は…正直、どうしたら良いかわかりません。ずっと義仁様のために力を使いたい。それだけでしたから。…でも、」

ぬらりひょん「でも？」

玉丸「…私が私のために力を使うことが、義仁様の御意思に沿うことになるのなら、それで恩返しがしたいです。」

ぬらりひょん「ほう。」

玉丸「具体的に何をすればいいかは…まだ…」

ぬらりひょん「それはゆっくり考えればいいわい。」

玉丸「…はい。」

ぬらりひょん「(小声でも)もしもの時はと言つておつたが、その必要はなさそうじゃの。よし！ろくろ首、わらしよ、出発の準備じゃ。」

暗転

回想終わり

玉丸:(M) そうして私は、町に養生所を構えたのだ。

玉丸「ふう…。雨が降つてゐるのに陽が差してゐる。それに湿つた土の匂い…。あなたと会つた日もこんな天氣でしたっけ。」

女性「あのぉ…」

玉丸「ここにちは。どうなさいました？」

女性「急な雨で足元が悪くて…うちの子がそこで転んじゃって…少し診てもらえませんか…？」

玉丸「構いませんよ。どうぞこちらへ。」

男の子「いてて…」

玉丸「あら、こんなに擦りむいて。痛かったですね。今治しますからね。」

男の子「う、うん。…すごい！綺麗な翡翠色の炎だ！」

男の子「傷が…治つた！お姉ちゃん、何者？」

玉丸「ふふ。はじめまして。私、玉丸と申す者でございます。怪我したらまたいらっしゃい。」

暗転

玉丸:(M) その男の子は、あなたと同じこと言った。

終わり